



濃は天領をはじめ大垣、高須、尾張の諸藩領が錯綜しており、河川に対する統一的対応や施策が困難であった。これを越えて幕府の治水政策を担ったのが笠松郡代と高木家であった。江戸期と現代の流域図をみれば縦横に枝分かれする流路群がいかに整理、統合されてきたを理解できる。また、水害が多発した幕末期の川筋絵図には堤外の寄州や中州が描かれ、河口部の洲を十万山、青鷺山、白坊主山など山と呼んで水害の元凶と見なしていたこと、養老山地の羽根谷、山崎谷などから押し出した土砂ロープの突出が揖斐川を閉塞した様子などを読みとれる。

II 旗本高木家と時郷・多良郷（石川 寛・鈴木 雅） 戦国期、美濃斎藤氏に属した高木家は石津郡六郷を支配した。その後、信長、秀吉、家康に仕えるとともに甲斐、上総をへてふたたび石津郡を本拠とする西家2千3百石、東、北家各1千石の旗本となった。牧田川沿いの宮に北・東・西三家が屋敷を構えた。高木三家は交代寄合として江戸期を通じて木曾三川流域の河川管理や治水工事に関係し、普請奉行や見廻り役、水行奉行などをつとめた。このため職務上、村々からの願書、普請に関わる仕様書、河川絵図など河川管理、治水関係の史料が大量に蓄積されてきた。しかし、西家のみが明治以後も地元にとどまり、当主らが史料の保存と整理に尽力してきたため散逸せず、一括して名古屋大学に収蔵されたのであった。

III 屋敷絵図を読む（大橋正浩） 大垣市上石津町宮の牧田川の河岸段丘に大名格を有した高木三家が各々陣屋を構えた。現在では、西高木家の表門と主屋の一部、石垣、東家の土蔵が残るのみだが、跡地には上石津郷土資料館が建っている。三家の建物鳥瞰図や屋敷

間取図が残っておりその詳細を知ることができる。また、天保3年の火災により北、西両家の大半が焼失したが、再建前後の変化を比較できる。

IV 高木家の川通御用（石川 寛） 寛永年間に根尾川の席田と真桑との用水争論で御用をつとめた高木家は以後、紛争地において実地検証と裁許結果の見分を行なうことになり、多数の争論史料が残された。根尾川山口の大堰築造により分水は6:4と席田の真桑に対する優位が定められていたが、これに番水制を取り入れている。寛文年間の紛争では両者を対等に配水する裁定を下した。この際の分水施設などを描く絵図から、土木および測量の高い技術が如実に示される。寛永10年以降は国役普請奉行を笠松郡代と高木三家が担当する制度が幕末まで続いた。木曾川水系での国役普請では、人足負担に水下と遠所で差を認めたり、人足負担の代わりに資材納入を認めるなど独自の負担方式を定めている。江戸初期、新田開発の進展とともに築堤や護岸水制が増加し、下流への流水が妨げられ水害が多発、村間、地域間の紛争や訴訟も急増した。宝永元年～2年に大規模な取払いを実施、流水の障害になる堤防の出張り、猿尾、乱杭、樹林などを徹底的に除去した。そして、以後の維持管理をおこなう水行奉行が制度化され、この常設職に高木家が就任した。これは幕府の治水政策が災害後の復旧から水害予防へ中心が移ったことを示すものである。川筋巡見は定期化され、笠松郡代と三家の年番で上流から海口までを見分し、取り払いを命じたり請願普請の可否の判断を下した。すなわち、各領主支配を超越する河川管理の特権が認められていたのである。寛政2年の伊尾川通取払絵図の長さは6mをこえ

るが、堤外地の畑や野、洲、猿尾や塚などが詳細に描かれ、当時の河川景観をリアルに展望できる。

V 宝暦治水（秋山晶則） 宝永の取払い後も毎年水害が発生したため、寛保元年に高須・七郷輪中73カ村が三川の分離を請願した。これは地域の利害対立を越え連帯して三川分離を要求した点で画期的である。翌年には流域調査を実施、川替えや川広げなどを上申したが取り上げられなかった。その後も村々から分離の要求が相次いだ。その背景には延享3年に過去5カ年間の平均損毛率が5割以上の村が192村と全体の8割をしめるほどの惨状がある。このため幕府も対処を余儀なくされ、以後16回にわたる御手伝普請が実施される。中でも、薩摩藩に命じられた宝暦治水は著名である。難工事は大樽川の洗堰設置と油島での喰違堰の築造であった。2年にわたる工事には580余人の藩士と約40万両が投じられ、総奉行平田鞞負をはじめ51名が自殺、33名が病死したという。死者は各地の寺院に葬られたが、その後薩摩義士として顕彰され治水神社や治水観音堂に神格化されて祀られている。注目されるのは、洗堰や分離堤を維持するため水防組織の結成が命じられ、以後の輪中における水防の共同体意識が高まり、のちの治水共同社などの結成につながっていく。油島での食い違い分離堤や大樽川の洗堰を詳しく示す絵図、益村と障村とを示す絵図から当時の技術水準や地域差をも読み取ることができる。なお、宝暦治水について杉本苑子の「孤愁の岸」（1962）を絶好の書として薦めたい。

VI 輪中と災害（石川 寛） 高須輪中絵図は対立する輪中を包含した複合輪中の特色を示す。北部の高燥地を占める古高須や秋江

に対し、江戸初期に南部の湿地を開いた本阿弥新田が含まれ、排水は大江川や中江川を通じて南端の溝中池に放流された。しかし、河床上昇により機能しなくなり埋め立てられ、新たに塚を集中させ揖斐川に排水させている。絵図には堤防下に多数の押堀が描かれる。これは破堤時の強い水勢によりえぐられた部分で修復堤は池を迂回した形を呈する。これは繰り返して破堤しやすい弱点であるため、埋め立てられる事が多い。勝賀大池は今日に残る押堀で、昭和27年台風でも決壊した。ここには水神を祀る大池神社が鎮座している。輪中の大問題は内水の排除である。本川の河床上昇により塚からの排水が滞り悪水滞留による被害が大きくなる。これに対して川下へ流路を延長する江下げ、川下に樋を埋め込んで通過させる伏越などの努力と技術改良が絵図に如実に描かれる。昭和51年の安八町森部の長良川破堤は大きな被害を生じたが、この地点は以前の樋門の位置にあたり、弱点の補強が不十分だったという。養老山地からの土石流による揖斐川流路の狭窄と上流へ逆流被害は深刻だった。砂留、川浚などが村の自普請で実施されたが、本格的な工事はデレーケらによる明治10年代の砂防工事を待たねばならなかった。

評者は2018年から西濃地域の調査を始め、多くの禹王遺跡を確認するとともに、わが国で最も色濃く治水神・禹王信仰が浸透していることを確認した。また、各地に平田鞞負やデレーケの銅像、顕彰碑や記念碑が多く残され、住民による貢献者への手厚い顕彰が繰り返して行われてきたことに注目した<sup>2)3)</sup>。

本書は木曾三川流域の河川と治水に対する地域と社会の対応について多くの情報と示唆を与えてくれる。古絵図の多用により視覚的

に理解しやすい工夫がされており、流域の歴史と地理、河川や災害に関心を持つ多くの方に推薦したい。

(立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員  
植村善博 記)

注

- 1) 名古屋大学附属図書館 (2019) 『旗本高木家と木曾三川流域治水』、44 頁。  
[https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000011Takagi](https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000011Takagi)
- 2) 植村善博 (2021) 「オランダ人土木技師の顕彰像とその歴史的意義」、佛教大学歴史学部論集、11、1-25。
- 3) 羽賀祥二 (2005) 「宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生」、名古屋大学附属図書館研究年報、3、75-102。